

生命の倫理

稲宮 健一

NHKの特別番組で遺伝子操作と生命倫理が取り上げられた。生物の設計図である遺伝子の謎が段々と解け、ある遺伝子配列と人体の特徴が結び付けられるようになってきた。そして、作画的にその配列に手を加え、意図的に新たな生命が出現させられるようだ。私と言うものは天与のものと思っていたが、他人の意図で生まれる前にスクリーニングを掛けられたり、作画的な性質が埋め込まれたりする新しい生命の誕生が許されるのだろうか。

人の生命の誕生に触れるこの領域は倫理上からタブーであり、各国の公の機関から研究範囲は厳しく規制されている。これは世界共通の理念である。しかしこの番組で、中国ではこの領域を逸脱した活動があると報じている。雲南省の世界最大級の霊長類研究所ではゲノム編集の研究用に四千頭の猿が飼われている。ここでは細胞レベルではあるが、ヒトとサルとのキメラを作った。目的は他の動物の体の中に人間に使える臓器をつくりだすことのこと。しかし、その過程で人間とも動物とも区分けのつかない中間生物が現れたらどうするのだろうか。

もう二十年程前のことだが、中国発の「人体の不思議展」が人気を呼んだ。ドイツで開発されたプラスチックイネーションという方法で、人体の総ての部分を薄くスライスして、透明なプラスチックの板の中に埋め込み、外から体の中の総てを微細に覗けるようにした。画期的な展示会と評判を呼び、会場に行った。確かに、リアルさに驚いた。しかし、ではここに展示されているのは誰なんだ。会場で係員にきいたが答えなし。これは誰なんだ。同じ疑問は世界の各所から持ち上がり、展示会は以降開かれなくなった。このように、遺体の総てを公衆の面前に晒され展示されているのを生前に了解されていたのか。遺体の尊厳は保たれているのか。時の政府に対する批判の自由がないのと同様に、社会の規範として人の尊厳に関して畏怖の念を論じ合う民族意識も湧きあがってこないのか。